

FLYING FISH



50

2012 SPRING

「フライング
フィッシュ」



INTERVIEW

佐久間健人 学長

世界を熟知し、風をよむ

今こそ教育改革!

高知から世界に挑む

NEWS

僕たちが体感した 東北の今

被災地でボランティア活動を行
った3人が語る、あふれる思い

学生たちの日々

絆を深め合う「楽祭～絆～」／
合同会社説明会／国際交流で新
年を祝う 留学生寮の新年会／就
職交流会／物部川を考える「地
域共生概論」／学生たちが商品
開発!「谷素山絵馬」で地域お
こし／毎年恒例!卒業コンサート
開催／震災対策の具体化に向け
て南国市に仮設住宅提案

表紙のコトバ=世界へ続く道

高知工科大は今年で開学15周年!
これからも続く長い道のりをふみしめ
て、高知から世界へ発進!

世界を熟知し、風をよむ 今こそ教育改革！高知から世界に挑む

チャンスをものにして、 幸運をつかめ

幸運の女神には、前髪しかないーチャンスは一度通り過ぎると、後から追いかけて後ろ髪をつかもうとしても、つかめないというイタリアのことわざだ。「準備をして待っていると、幸運の女神をとらえることができる。幸運をつかむためには準備を怠りなく、チャンスが来たら一気にやること」という佐久間健人学長。準備期間、約10ヶ月という異例のスピードで、私立大学として初の公立大学法人化を実現させた立役者である。「タイミングを見極めて、総務省、文科省に出向き、法人化の意向を伝えました。東京の一人当たり県民所得は当時約460万円で、高知は約210万円。これだけの地域格差が生じた時に、地方こそ授業料の安い大学が馴染む。首都圏一極集中の

行き過ぎに対する是正策として、こういうメッセージを出したいと言うと、快諾してくれました。準備しても幸運が来るとは限らない。でも、しない限りは来ません」。

世界の常識を覆した、セラミックス超塑性研究の第一人者である佐久間学長は、2005年に副学長として本学に着任し、2008年に学長に就任。それ以降、工学部再編をはじめ、数々の教育改革を成し遂げてきた。そこには、常に学長の「風をよむ力」がある。

世界基準の人材を育てる ために

2009年の公立大学法人化以降、佐久間学長が特に力を注いでいるのが、教養教育だ。今後の教育のあり方を考える上で、学生たちが世界で活躍するための大事な鍵が、教養にあるという。

「日本の教育システムで教養が身に付く授業はほとんどありません。私自身が教養の問題を意識し始めたのは、助手になった頃。スウェーデン人の留学生に、『スウェーデンってどんな国?』と聞いたとき、10分間もあれこれ話すのを見て、自分は外国で同じように答えられないことに気付きました」。海外では、自国についていかに話せるかが、教養の有無を測るものさしになる。特に欧米の知識人は、相手が共通の土俵で話せるレベルの人間であるかどうかを、会話を通して見極めているという。「相手の

国のことはおろか、自国のことも知らないのでは、国際関係なんてあり得ない」。そんな自身の経験に基づいた思いから、今秋には学長自ら教養の講義を行い、世界で活躍できる社会人になるため、最低限知っておいてほしいことを学生たちに伝えていく。文化、歴史、経済、国際情勢など、講義内容のジャンルは実に幅広い。

また、佐久間学長は、かねてよりこんな危機感を抱いていた。「今の受験制度では、似通ったレベルや考え方の学生が集まって来るため、人間力を身につける上で最も重要な多様性とは無縁の世界になってしまうのではないか」。そこで、昨年度から、課外活動の支援を本格的に始めた。練習環境の整備を始め、強化種目を選定し、課外活動と学業の文武両道を目指す特別推薦入試を開始した。その結果、女子卓球部は、昨年の全国国公立選手権で団体3位、ダブルス準優勝など、早くも結果を残し、男子バレーボール部も、来年度は四国選手権で優勝を狙えるレベルにまで急成長を遂げている。体育館の雰囲気が一変し、他の部活に良い影響を与えていることも大きな成果の一つだ。

さらに、3年前から年に一度開催している、日本を代表する若手演奏家によるコンサートも、佐久間学長が力を入れてい

日本のトップ演奏家によるコンサート「心に響く音楽の調べ in 工科大」。集中講義の環境として実施し、一般にも公開している。



元世界王者の濱田美穂監督率いる女子卓球部。昨夏には中国に遠征し、中国トップレベルの瀋陽工業大学卓球部と親善試合を行った。



る行事のひとつだ。「スポーツや芸術は非常に厳しい世界。あのレベルを維持するために彼らがいかに努力しているかを見てほしい」。あらゆる分野の一流にふれることが、教養の理解につながってくる。

これからの教育と 日本社会を見据えて

世界的に見ても、大学は厳しい競争の時代にある。「2年前、ケンブリッジ大学の学長は、『今は大学が世界的な競争の嵐の中にあり、立ち止まるという選択肢はない』と言っています。ましてや、本学が立ち止まっている余裕はありません。しかも、日本の大学改革は、中国に著しく遅れをとっている。だから今、教育改革と言っているのです」。

そんな中、今の日本社会は、耳障りのいい言葉だけを受け入れ、聞きたくないことは聞かない、口は出すという無責任な体制になっていると佐久間学長は警鐘を鳴らす。「こんな現状だからこそ、学生たちには、世界の状況を見て、自

ら考え、判断できる力を身につけてほしい。早く目を覚まして、日本をなんとかしたいいけないということに気付いてほしいのです」。今こそ、教養教育が不可欠な理由はここにもある。次世代が日本を変える原動力は、教養にあるといっても過言ではないのだ。教養があつてこそ専門力も輝きを増すといえる。

世界を知れば知るほど、日本の現状はおのずと浮かび上がってくる。研究者として世界を飛び回って来た経験が佐久間学長の思いの根幹にあるのだろうか。「それもあるかもしれないけど、青臭いっていう性格かもしれない(笑)。だまっていられないんですよ。今の日本にこれだけの危機感を持てたのも、高知に来たおかげです。東京にいたら気付かなかったことばかり。高知には地域をなんとかしたいと言う人が非常に多い。これこそ財産です」。そよそよと吹き始めた風が、旋風となる日も近い。

教養を深めるには、
日々の読書がキホン！

研究者時代に読んでいた本は、専門書ばかりだったという佐久間学長。研究を退いた今は、解放された気分で、好奇心の赴くままに読書を謳歌しているそう。ドキュメンタリーが好きで、特に外国人ジャーナリストが描く日本社会には、新しい視点があり、非常に勉強になるという。「読書をする、今でも目から鱗が落ちるようなことに時々出会うんです」。教養を深めるにはまず日々の読書から、なのだ。

佐久間 健人



僕たちが行って、見て、感じたこと

小澤 僕が見た被災地の風景は、本当に何も無いという状況でした。元に何があったのかかわからないので、悲しいという感情すら湧いてこないというか。何もなさ過ぎて、何も感じられなかったですね。

弘光 最初に驚きを持って感じたのが臭いでした。あの臭いはニュースではわからない。メディアによる報道と、行って感じることはやっぱり全然違うんだと思いましたね。とにかく現場では処理しきれない感情が多すぎて、戻って来て改めて感じる事がたくさんあります。

西川 テレビで見た映像から、被災地の状況をイメージできてはいましたが、実際の現場を見た時は衝撃でした。でも、1ヶ月もいるとその風景が当たり前になってしまっ。地元の人が話してくれた「これが日常になってしまったのだから、覚悟を決めて生きていくしかない」という言葉が印象的でした。

弘光 そんな中でも、地元の人はずごく元



言葉では表せない、ヘドロの悪臭が辺り一帯に漂います。



相当量のヘドロが堆積し、予想以上の重労働でした。

3

KUT

西川くんの活動記録

宮城県気仙沼市
2011年10～11月

研究室の活動の一環として、仮設住宅の環境改善に取り組む。室内に防音シート、窓や玄関先には軒を設置するなど、地元の人たちの要望に応じた様々な作業を行う。



仮設住宅と言っても多種多様。住環境が良くない住宅が数多く見受けられました。



漁師さんの仕事場で一日だけお手伝い。養殖用ホタテに穴をあけ、紐を通す作業です。



モンゴルの移動式住居「パオ」で寝泊まり。日常の有り難さが身にしみました。

地元の皆さんは、思った以上に明るく元気で、なにより強い。自分たちが勇気づけられました。



ボランティアの心得

1 地元の意志を何より大切に

相手を思いやる心の余裕を持ち、地元の意志を尊重することが大切です。

2 体調は万全の状態

想像以上の現実に立ち向かうため、心もカラダも元気な状態で向かいましょう。

3 すべては自己責任で

宿泊場所や食事の確保は自分自身で。被災地の負担にならないよう、準備は万全に。

4 できることを無理なく

自分ができること、できないことをわきまえて、無理のない行動をしましょう。



▲一緒に作業したボランティアの方々の熱意に、感化されました。
◀2階まで浸水した高齢の方の自宅から、荷物を次々と運び出しました。

4

FLYING FISH

僕たちが体感した東北の今

被災地でボランティア活動を行った3人が語る、あふれる思い



弘光 太郎くん
工学部社会システム
工学科4年
高知県出身

小澤 武史くん
マネジメント学科1年
宮崎県出身

西川 直希くん
大学院社会システム
工学コース修士1年
大阪府出身

普通の日常が失われた光景を目の当たりに。今、自分たちがいかに幸せかを実感しました。



弘光くんの活動記録

宮城県石巻市・女川町
2011年6月9～13日

所属する建設マネジメント研究室と愛媛大学が合同で結成した「災害ボランティア団」の活動として、現地入り。側溝に堆積したヘドロの除去作業を行う。

小澤くんの活動記録

岩手県陸前高田市
2011年9月12～14日

特別講義に來られた三重県松坂市の副市長が所属する復興支援団体の活動に参加。津波で流された屋根や大木の撤去、浸水した家から家具などを運び出す作業を行う。



※災害時の事業継続計画



学生たちが商品開発！ 「谷泰山絵馬」で地域おこし

高知の活性化を目的に活動する、学生団体「商品開発サークル」が開発した新商品「谷泰山絵馬」が完成しました。その商品は県産素材を利用した「鉛筆削り」で、土佐山田町発祥の「土佐打刃物」を、鉛筆削りの刃の部分に利用しようと考案。土佐南学中興の祖として知られ、現在では“学問の神様”として墓所（土佐山田町）に多くの人が合格祈願に訪れる「谷泰

山」にちなみ、絵馬をかたどりました。部長の濱田将くん（写真中央）は、「受験のお守りはもちろん、学業に関わる多くの人に使ってもらえれば」と、地元の活性化に役買える充実感やアイデアを形にできた達成感でいっぱいの様子。完成した「谷泰山絵馬」は、2月19日（日）に行われた谷泰山先生墓前祭でお披露目、販売されました。



物部川を考える「地域共生概論」 フィールドワーク成果報告会

物部川流域の山・川・里・海経営の実務者や研究者による講義とその指導のもとに実施するグループ毎のフィールドワークから、自然環境を活かした産業の現状を理解し、その保全が人々の暮らしと産業の基盤となることの理解を目的とする講義「地域共生概論」のフィールドワーク成果発表会が、1月28日（土）、一般の方々にも公開して実施されました。

物部川川祭りを通した「ゴミを考える」班、物部のゆず狩りツアーに参画した「ゆず狩り班」、土佐山田商店街の活性化を提案する班、GKH（高知総幸福度）の開発を提唱する班・・・各プロジェクト毎の発表が行われ、地域住民の方々も交えた討論会では今後のプロジェクトの運営や、情報発信について活発な意見交換がなされました。



する講義「地域共生概論」のフィールドワーク成果発表会が、1月28日（土）、一

音楽系サークル合同企画！ 絆を深め合う 「楽祭～絆～」

12月10日（土）、本学講堂にて、音楽系サークル合同の「楽祭～絆～」が開催されました。地域の皆さま、部員同士、そして音楽を楽しむ者同士の絆を深め合うことをテーマに、学生自ら企画・主催したものです。準備から複数の学生団体に関わることで、苦労も多い反面、ひとつのものをつくりあげる喜びを感じる機会にもなったようでした。当日は、約100名の観客に見守られ、それぞれの団体が曲や歌を披露。イベント後半には、ピアノ同好会と吹奏楽部、アカペラサークルのコラボレーションステージがあり、「楽祭」ならではの音の響宴が実現しました。また、当日は高知で活動されているBiscottiさんと、Musical Timeさんにもゲストとして登場いただき、イベントを盛り上げていただきました。

【演奏】
吹奏楽部 WINDBRASS/ピアノ同好会/アカペラサークル
KOCO'A/DTM同好会 RESONANCE
【運営】（舞台照明操作、音響操作、録音作業）
PA同好会/DTM同好会
【制作物】（告知フライヤー）
アートサークル



吹奏楽部 WIND BRASS 毎年恒例！ 卒業コンサート開催



吹奏楽部WIND BRASSによる第13回定期演奏会「卒業コンサート」が、2月26日（日）、本学講堂にて、今年も開催されました。今春卒業する部員たちにとっては、活動の集大成として催されたその内容は、クラシックはもちろん、J-POPからアンサンブルまでの多彩なプログラム。抽選により観客の方が楽曲の一部を指揮するというサプライズまであり、ご来場いただいた観客の皆さまとともに、楽しいひとときを過ごすことができたようでした。

震災対策の具体化 に向けて南国市に 仮設住宅提案

1月30日（月）、南国市役所にて大谷英人教授（システム工学群）と同研究室の篠原尚登くん（大学院修士課程社会システム工学コース2年）による「南国市における震災復旧仮設住宅建設の事前対策」と題した研究報告会を開催しました。出席した同市や県の防災担当者らに、南海地震による被害予想をもとに割り出した仮設住宅必要戸数と使用可能な候補地や建設可能戸数、そして過去の震災を教訓に、被災地域の人々がまとまって同一地区の仮設住宅へ入居する必要性などを発表。篠原くんは「津波被害の想定が標高10メートルなら2,260戸、15メートルまで引き上げた場合は現在の公有地だけでは約4280戸の公的仮設住宅が不足する。防災公園の整備や民間地利用に向けた制度づくりを事前に進める必要がある」と提言し、仮設住宅の建設計画が具体化されていない本県に、この研究結果が活かされることを望んでいました。



県内約 60 企業が参加 合同会社説明会

1月18日（水）、19日（木）の2日間、大学会館において合同会社説明会を開催しました。学士課程3年生と修士1年生を対象に、より多く、そして様々な業種の企業・団体と面談する機会を提供することを目的に毎年開催しており、今回は2日間で県内約60の企業にご参加いただきました。説明会やエントリーシートの解禁が例年より2ヶ月ずれこみ、短期決戦となった平成25年春卒業予定者たちの就職活動もすでに本格化しています。会場内では真剣な表情でメモをとり、熱心に質問をする学生たちの姿が多く見られました。



それぞれの思いを胸に、 新たな旅立ち 卒業式・学位授与式

3月16日（金）、平成23年度卒業式・学位授与式が執り行われ、学士課程356名、大学院修士課程120名、博士後期課程8名の計484名の卒業生が新たな一歩を踏み出しました。式では佐久間学長から「卒業される皆さんには常に視野を広く持ち、世の中をより高い視点から理解すべく研鑽を重ねてほしいと思います」とはなむけの言葉が贈られ、卒業生・修了生代表の岩浅僚くん（工学部知能機械システム工学科）からは「今後は高知工科大学で得た知識と経験に誇りと自信を持ち、高い志をもって、社会に貢献していきたいと思います」との謝辞が述べられました。式終了後は、卒業記念イベント「えん」が開催されました。これは香美市商工会と在学生の共催により1期生の卒業式から続く本学伝統のパーティー。屋台では商工会の皆さんにご用意いただいた郷土料理などが振る舞われ、卒業生たちはお世話になった方々や友達、そしてキャンパスに別れを惜しんでいました。

国際交流で新年を祝う 留学生寮の新年会



1月7日（土）、留学生が暮らす楠目寮にて、毎年恒例の新年会が行われました。本学には現在約40名の外国人留学生在籍しており、この新年会は同寮が誕生した平成15年から続けられているもので、近隣住民の皆様との交流と国際文化理解を深める目的で開催されています。当日は、留学生や近隣の方々、日本人学生、教職員も加わり、食事やコミュニケーションゲームなどで、新年を祝う楽しいひとときを過ごしました。

先輩たちに就職相談！ 就職交流会

卒業生と在学生との就職交流会が開催されました。1月14日（土）の関西支部就職交流会では、学生36名、卒業生9名が、1月21日（土）の関東支部就職交流会では、学生24名、卒業生9名が参加しました。学生たちは、就職活動の相談のほか、先輩が勤める会社や業務についての話などを熱心に聞き、卒業生も親身になって話をされていました。限



られた時間での交流でしたが、学生にとっては貴重な情報を得ることができたようです。卒業生からは、学生と話すことで「初心に戻ることができた」「刺激をもらった」などの感想もいただき、実りある交流会となりました。



NEWS
1

気候変動とその影響を理解する シンポジウム開催

「気候変動と適応策に関するシンポジウム」が1月28日(土)、29日(日)、2月5日(日)、18日(土)の4日間、開催されました。本学の社会マネジメントシステム研究センターと東京大学との連携により研究している、気候変動の豪雨や干ばつ、社会や経済に与える影響予測について情報提供するものです。

このシンポジウムは四国4県の5か所で実施されており、行政や専門家と市民との対話を通じて、課題を解決する適応策を決定していく「地域経営システム」を創造するための社会実験でもあります。

二酸化炭素などの温室効果ガスの増加により、どのように気候変動が生じるのかを、水の循環現象に基づいて説明するとともに、それによる豪雨や干ばつの変化や、四国の水資源への影響により、経済や市民生活にもたらされる変化、市民の水に関する満足度がどう関わっているのかについて解説します。

このイベントは5年計画で昨年より実施しており、今年が2年目です。年々、気候変動に関わる情報が充実してきており、今後も大きな期待を寄せています。

NEWS
3

地域活性化への新しい提言！ 「地域の光を観る」公開シンポジウム

1月28日(土)、本学にて、公開シンポジウム・地域活性化システム論Ⅱ「地域の光を観る」～観光による地域活性化への新しい提言～を開講しました。

これは本学が法政大学、札幌学院大学、沖縄大学と連携して行っている、全国の地域で活躍し、地域活性化を推進する人材育成「プロフェッショナル(まちづくりリスト)育成プログラム」事業の一環として開催したものです。

講師にデザイナーで梅原デザイン事務所主宰の梅原真氏、石垣市経済振興公社専務取締役の真栄田義世氏、まちづくりコーディネーターで札幌国際大学観光学部教授の吉岡宏高氏の3人をお迎えし、約120名の県民・学生が聴講しました。

NEWS
5

研究開発のさらなる活性化に向けて ナノテク研シンポジウム 2011

12月3日(土)、本学にて「高知工科大学ナノテク研シンポジウム 2011」が開催されました。

ナノテクノロジー研究所が、学内外のナノ材料研究者の互いの研究分野を知ること、今後の研究協力の可能性を見出し、研究をさらに活性化することを目的としています。

昨年に続き2回目となる今回は一般の方にも公開され、学内外のナノ材料研究者の交流のきっかけになったようです。

NEWS
2

学長賞はカツオタタキバーガー！ 高等学校産業教育研究発表会

1月12日(木)、本学講堂にて「高等学校産業教育生徒研究発表会」が開催されました。産業教育関係などの高校で学ぶ生徒の主体的研究活動を活性化し、産業教育の振興を図るとともに、生徒のプレゼンテーション能力の向上を目的とした取り組みです。

本発表会は半世紀以上の歴史を持ち、平成20年度より地域教育支援の一環として本学を会場としています。さらに、大学の視点から特に優れた研究活動には「高知工科大学長賞」を授与するなどしてきました。

開会式で、昨年度を受賞校「高知県立高知東工業高等学校」による高知工科大学長賞カップの返還

とそのレプリカ授与が行われた後、参加13校により様々な工夫を凝らした15テーマのプレゼンテーションが展開されました。

参加生徒への参考事例として行われた本学大学院生2名による英語でのプレゼンテーションにおいても、熱心に質問する高校生の姿が見られました。

《高知工科大学長賞》

自律創造型地域課題解決学習
～カツオタタキバーガーを全国に広めよう！～
大方高校(かつおガールズ)

NEWS
4

国際事業を担う人材を短期育成 国際建設プロジェクト マネジメントコース開講

11月28日(月)から12月21日(水)にかけて、本学及び東京教室において、短期セミナー「第2回国際建設プロジェクトマネジメントコース」が開講されました。

これは、社会システムマネジメントコースの主要科目を骨格にし、国際事業展開に必要な人材の短期育成を目指したものです。我が国の建設産業が持つ特性を国際市場の実態と比較しながら理解し、国際競争力の向上の基盤となるコスト管理、スケジュール管理、契約管理、リスク管理、プロジェクトファイナンスなどを体系的に捉えたプロジェクトマネジメント技術が学べます。

昨年3月に実施した第1回セミナーでは発注機関、建設企業、コンサルタントなどの中堅技術者を中心に行われました。今回は第二弾として、草柳俊二教授(システム工学群)の講演や、実際に海外プロジェクトに携わる方々によるパネルディスカッションを実施。様々な課題とそれに対する取り組みについてお話しいただき、熱心な議論が行われました。

本セミナーは、文部科学省が定める「大学等の履修証明制度」に対応した教育プログラムで、修了者へは学校教育法に基づく「履修証明書」を交付されました。

NEWS
6

JAXA、北海道大学と共同開発 観測ロケット実験

1月12日(木)、山本真行研究室(システム工学群)が、宇宙航空研究開発機構(JAXA)、北海道大学と共同で開発した搭載機器および地上観測装置を用いた宇宙実験が行われました。

「熱圏」(高度80～1000km)と呼ばれる大気の動きを調査する実験で、高度を変えてロケットからリチウム蒸気を3回放出。蒸気が太陽光を受けて輪状に赤く光る発光雲から、大気の温度や風の振る舞いを3地点(鹿児島県内之浦、高知県宿毛市、室戸市)にて撮影、観測に成功しました。

ロケットは午前5時51分、鹿児島県内之浦宇宙空間観測所から打ち上げられ、6時前頃から加熱してガス状にしたリチウムを噴射。リチウムは約1時間ほど漂い、同観測所と宿毛、室戸両市に設置したカメラで撮影されました。



KUT 活動報告 2011 winter-spring

NEWS
8

充実の学術・国際交流 ハルビン工業大学、周副学長らが来学

12月15日(木)、ハルビン工業大学から周玉副学長率いる8名の訪問団が来学されました。

ハルビン工業大学は、211工程および985工程に選ばれた中国トップクラスの理工系大学で、本学とは国際交流協定を結び、昨年、今年と2年続けて本学学生が短期研修で訪問するなど、学生、教員の交流が盛んに行われています。

当日は訪問団と本学役職者との意見交換、施設・研究室見学の後、ナノテクノロジー研究所主催の講演会にて同大材料学院の賈徳昌教授に、全学教員対象のサイエンスカフェでは周玉副学長にそれぞれご登壇いただきました。

その他、本学大学院博士後期課程に在籍する中国からの留学生との懇談など、充実した学術・国際交流を図ることができました。

NEWS
7

人が育つ大学教育をめざして キャリア教育シンポジウム開催



大学は「フィニッシング・スクール」として社会が求める人材を育成し、送り出す役割を担っており、様々な取り組みが行われています。本学では2003年から新入生向け導入教育「スタディスキルズ」を始め、4年間を一気通貫する7つのキャリア教育体系を整備して3年が経過しました。

そこで今回、「人が育つ大学教育をめざして」をテーマに、第3回キャリア教育シンポジウムを開催し、約100名の方にご参加いただきました。企業・大学・高等学校から6名の講師をお招きした講演や本学の取り組み発表の他、パネル討議では会場の学生を始め、一般の方からも意見や提案があり、「人が育つ教育に共感した」との感想をいただくなど、大きな盛り上がりを見せました。

いただいた情報や意見交換から今後の方向性を探り、本学では教育力のさらなる向上を図ります。

NEWS
9

公共交通の利用促進へ K-cle 実証実験はじまる

公共交通活性化の条件のひとつに、駅から目的地までの移動手段の充実があげられます。公共交通のその先、「Last One-mile Transit」が不便では公共交通の利用は促進されません。

今回電動アシスト自転車を、本学と最寄り駅である土佐山田駅および香美市役所をより便利にする「足」として取り上げ、3拠点に専用駐輪施設を設置し、本学が開発した非接触充電式の電動アシスト自転車10台(高知工科大学:5台、香美市役所:2台、土佐山田駅:3台)と携帯電話からwebサイトを經由して充電状況の確認および予約・使用できるシステムとの併用により運用し、本学教職員を対象に1年間の実証実験を開始しました。

「こんなときK-Cle」をキャッチフレーズに、大学職員による地元土佐山田町内への日常業務における移動や、普段自動車を利用する高知市内への用務に本システムを利用することで、公共交通(JR等)の利用促進および低炭素社会の実現を目指します。



平成23年度卒業式において各種表彰が行われました。

学長表彰 総合成績優秀者

工学部					マネジメント学部
物質・環境 システム工学科	知能機械 システム工学科	電子・光 システム工学科	情報 システム工学科	社会 システム工学科	マネジメント学科
右川 貴子	岩浅 僚	西森 友康	和田 倫弥	秋山 心平	山中 祥平

学長表彰 専門領域科目成績優秀者

工学部					マネジメント学部
物質・環境 システム工学科	知能機械 システム工学科	電子・光 システム工学科	情報 システム工学科	社会 システム工学科	マネジメント学科
井上 真希 右川 貴子 小野 みどり 下元 直也 藤田 夏斗 横濱 拓海 仲上 将央 松本 和茂 高橋 俊也	近森 翔太 岩浅 僚 福井 遼 新本 優 小笠原 慧 板東 弘司朗 吉門 潤 田中 剛 木地尾 友喜 矢野 佑樹	西面 尚彰 中西 功太 西内 創亮 西森 友康 横山 朗也 美馬 宏之 三好 雄大 松田 武志 近藤 祥平 森本 晃	伊藤 俊之 今村 和貴 尾原 功剛 川村 高之 北山 菜穂 工藤 慧 清水 滋仁 武吉 智也 橋村 仁紀 森田 茂彦	江里口 涼太 岡本 元輝 芝床 仁志 中阿地 卓也 野村 琢人 兵頭 慶祐 福田 雄輝 前田 一視 宮崎 有矢 常德 大祐	坂本 里絵 西込 郁弥 安部 紀里 前田 早紀 北村 美穂 此平 駿哉 平山 桂子 中平 早花 藤山 廣行

環境理工学群

重松 晃次

末松賞

工学部					マネジメント学部
物質・環境 システム工学科	知能機械 システム工学科	電子・光 システム工学科	情報 システム工学科	社会 システム工学科	マネジメント学科
右川 貴子 小野 みどり 中田 貴大	岩浅 僚 新本 優 福井 遼	美馬 宏之 西内 創亮 湯浅 祐二	尾原 功剛 川村 高之 和田 倫弥	秋山 心平 芝床 仁志 常德 大祐	安部 紀里 前田 早紀 此平 駿哉

学術研究奨励賞

大学院修士課程		大学院博士後期課程	
物質・環境 システム工学コース	電子・光 システム工学コース	基盤工学コース	
田代 大陸	針谷 達	山本 桃子	TU Huawei



見たい!聞きたい!知りた!工科大あちこち探訪レポート



「体育館付近で行われていた工事が完了した」という情報を入手して、施設管理部の和田さんにお話を伺うことにしました。今回も引き続き、後藤・寺原がお送りします!

学生特派員

左: 後藤夏実さん(環境理工学群2年)

右: 寺原春菜さん(環境理工学群2年)



施設管理部の和田さん

構想3年!?
現在、高知工科大学はスポーツ活動に力を入れ始めています。しかし、練習の場が少なく、学内に1つしかない体育館を各団体交代で使用していたため、必然的に練習時間が短くなり、思うように力が伸ばせない状況でした。
そこで体育館の増築が計画され、構想から3年を経て、新体育館がこのほど完成!開放的な雰囲気、緑やレンガを使用した工科大のカラーとデザインを兼ね備えたものとなりました。見事にキャンパスと一体感のある建物に仕上がっています。

気になる体育館の中は?

外観は2階建てで、体育館や武道場とは異なる印象です。早速、気になる内部を案内していただきました。正面玄関に入ると、太陽の光が射して明るい雰囲気。正面奥には既存の体育館とつながっている扉があり、出入りできるようになっています。元々あったかのような違和感のなさが、素晴らしい!
まず案内されたのは、玄関から入って右手にある弓道場。夜でも使用できるように照明完備です。これで、いつでも練習できそうですね。そのまま弓道場の裏に回ると、防災倉庫が



2階武道場

剣道、柔道、テコンドー、合気道といった様々な部活で使用できます。床下にスプリングがついていたり、雑巾がけ用にシンクが備えられていたり、多機能な構造でした。

ジッカンnote

後藤 いやー、楽しかったね。学生の中で一番に見せてもらえるなんて、得したね!
寺原 桜が咲く頃には、ここもたくさんの方が使っているのかな。桜といえば、正面玄関前の桜は夜にライトアップできるようにされていて、咲くのが楽しみだね。

後藤 そうそう。それにその前にあるベンチ、理事長が開発された自己充填型コンクリートを使っているんだって。
寺原 複雑な形をコンクリート自身の力で形成するとはすごい!



一人暮らしの学生アパートではなかなか見られない、自動で温度調節してくれるシャワーがあるのです。学生アパートでは湯と水の調整が面倒なので住みたくないですね……。2階に上がると、武道場が!そして次に向かったのは更衣室です。ここにも、これまでにない素敵な機能が!一人暮らしの学生アパートではなかなか見られない、自動で温度調節してくれるシャワーがあるのです。学生アパートでは湯と水の調整が面倒なので住みたくないですね……。2階に上がると、武道場が!



弓道場は完成まであと少し

土の下から!?
こういう大きな建築を見学していて興味が出てくるのは、施工中のハブリング!早速聞いてみると、……ありました!

「社会生活の礎に」

「来たるべき社会で活躍できる人材の育成」これは工科大の理念の一つです。和田さんは「リーダーシップを養い、社会に出たときに役立つような活動を行ってほしい。その一つとして体育館を利用してもらいたい」と話してくださいました。
私たちはその願いを胸に、新体育館をはじめとする施設を使用し、自己教育力を身につけていきたいと思います。さらには、吉田准教授からは「閉鎖的ではなく、開放的に使ってほしい」というお話もありました。たくさんの方が込められた体育館、大切に利用させていただきます!!



がんばらうネ!

工科大 4

Machi no KUT Ouen-Dan Report

今回のインタビューは、香美市議であり、大学のすぐ近くで酒店と飲食店を営む山崎眞幹さん。お子さん二人が本学卒業生で、本学後援会の副会長もつとめていただいております。

学生たちには、大学祭で音響を担当してくれる「ヒゲのおんちゃん」として、なじみ深いかもしれません。

実は、私と同学年でもあり、学生時代には、2人とも大江健三郎や谷川俊太郎などの作品を耽読していたよう。おいしい最中とコーヒーを頂き昔話をしながら、大いに本音で語り合いました。

今回のインタビュアー
事務局学生総括部長 入野耕一

—— 山崎さんには、開学以前から高知工科大学に様々な支援をいただけてきました。ありがとうございます。開学して15年がたちましたが、本学に対して今、どのような思いをお持ちでしょうか。

20年前に、大学ができるということで、地元が賑わう起爆剤になると夢を膨らませ、関係する方々と共に様々な取り組みも行ってきましたが、それぞれの夢が現実のものとなったかと言えば、関係者の一人としてその非力さを自省せざるを得ません。一つ例をあげれば、先日、香美市が小中学生に行ったアンケートの「香美市で自慢できるものは何ですか」という項目の回答に、工科大の名がなかったのは残念です。

—— そのように感じられる原因はどこにあるのでしょうか。

私見で少し誤解を招くかもしれませんが、アンケート結果は、地域とのつながりを大切にしてきたはずの「日本にない大学」が、小中学生にとっては「香美市にない大学」となっていたわけです。大学も住民も共有できていると思っ

香美市で自慢できる大学になつてほしい。

ていたその理念にギャップが生じているのでしよう。

この間、以前イベン

トで知り合った学生から挨拶

されて、嬉しいと同時に、「挨拶」という当たり前のことを嬉しいと感じることに違和感を憶えました。地域の中で人情的な結びつきが築かれず、アパートとコンビニと大学の間だけで生活が完了する学生がいる現状をみれば、私自身が20年間夢見ている、彼らがまちの中で学生生活を謳歌する姿は、まだ道半ばです。

—— そのように大学や学生に対し、率直な感想をいただくことはありがたいことです。むしろ、山崎さんの言葉から、本当に大学を愛してくれているのだと改めて感じています。私ももう一度、原点に立ち返って、大学と地域の人々との新しい関係をつくり上げていく時期に来ているようにも思います。

さて、工科大生にエールを送るとすれば、どんな言葉を頂けますか。

常に「君たちの行く先に“幸”多かれ」と祈っています。そして、在学中はしっかりとまちの「住民」になってほしい。まちが最大限活性化するには2500人の学生みんなが、まちの中でいきいきと学び、暮らすことが必須条件です。そのことが君たちには様々な経験や出会いを、周りの人々にも様々な出会いや幸せをもたらし、君たちの幸せにつながります。その幸せの種の育て方を学んだこのまちは、いつでも君たちを「おかえり」と温かく、なつかしく迎えてくれる第二の「ふるさと」となるのです。そんな学生たちがいて、「日本にない大学」の実現ができると考えますし、私もその実現のために微力を尽くし続けたいと考えています。

インタビューを終えて

気が付けば、あっという間に2時間が過ぎていました。互いの学生時代を振り返りながら、話が始まったわけですが、聞き手も結構熱くなってしまいました。どうやら、2人は本当に大学が大好きなようです。そのことに改めて気づくことができましたことに感謝します。

応援団員

04

山崎酒店店主 香美市議会議員

山崎眞幹さん